

国際政治論 国際政治 64号 (一九八〇年五月二十五日)
日本国際政治学会 村木汎
〈書評論文〉

中嶋嶺雄著『中ソ対立と現代』(中央公論社、一九七八年、二九八頁)

——国際学界における位置づけの視点から——

木村汎

本書を、私は、近来にない知的興奮を感じつつ読了した。永年の学問的蓄積を、このように見事な形で結晶化することに成功された著者に、同業の一人として、羨望とともに、かぎりない刺激と励みを感じた。この感想は書評を依頼されて再読した今も変わらない。

まず見事な構成と内容が、本書の特色である。中ソ両国ならびにその「中間地帯」にかんする、地政学的、問題意識を明らかにした後、中ソ対立のレヴェルを、(1)民族的、(2)国家的、(3)イデオロギイ的、(4)政府的な対立、の四つに分類する方法論を採用している。つづいて、主として中ソ友好条約締結、朝鮮戦争、高岡事件の三つを具体例としてとりあげ、中ソ亀裂の初期の段階に新しい光をあて、よって、わが国はむろんのこと、欧米の学界に寄与する独自の理論

を提出している。「戦後アジアの再考察」(傍点=木村)、との副題が与えられている所以である。最後に著者は、米国の専門家に永らくみられた中ソ一枚岩の神話を一貫して批判する立場を貫くと同時に、逆に、未来展望に触れた最終章において、中ソ対立の絶対化ないし神話化を戒しめる周到さをしめす。

堅実かつ広範な資料の渉猟、依拠にも、感心させられる。欧米の最先端をゆく学説を参考にすると同時に、D・グリーン、M・ペロフ等の今日的価値を強調する勇氣をしめす。

日本の若い学徒の論文も、積極的に吸収している。文章は、メリハリが利いた、男性的な小気味のよいもので、決して容易なテーマを扱っているとはいえないにもかかわらず、思わず最後まで読了さ

せる魅力と論理性をもつ。巻末につけられた、事項および人名の索引、参考文献一覧も、便利、親切で、几帳面で、いたり尽せりの著者の性格を反映しているよう見受けられる。

残念ながら、書評者は、中ソ関係を直接専攻テーマとするものではなく、とういて中嶋氏の本書を、対等の立場で論ずる学識を持ち併せていない。そこで、援軍として、利用するのは、欧米の同種の研究業績である。つまり、中嶋氏には失礼かもしれないが、以下、私が採用する方式は、直接、正面から本書を紹介、論ずる *book review* ではなく、欧米の類書とつき合わせる作業を通じて、いわば間接的に中嶋氏の近業の特徴を浮彫りにしてみようとする一種の *review article* 方式である。本来、書評者個人の筐底に秘めておくべき類の、たんなる整理メモであり、きわめて恣意的、主観的なもので、中嶋氏の著作の忠実な紹介でも客観的な要約でもないことを、予め著者および読者にお断りしておきたい。

一 中ソ対立の起源

本書の第一の特徴は、中ソ対立の歴史的過程の出発点を、欧米の通説に比べ、ずっと早い段階に遡らせている点にある。中ソ対立の形成過程、あるいは対立が公然化する以前の秘められた、潜在的、萌芽期に、注目・強調している。

最近のソビエト公式見解は、中ソ両国が「困難な時期を迎えたのは、一九五〇年後半〜六〇年代はじめ」と、説く。また欧米の通説も、スターリンの死(一九五三)ないしスターリン批判がおこなわ

れた第二〇回共産党大会(五六)をもって、中ソ対立の開始点とみなしている。米国のH・ヒントンは、五三年を対立の「起源」とし、英のR・マックファッカーらは、五六年の第二〇回大会を対立の「出発点」とみなし、米のD・ザゴリヤは、五六―七七年に對立の「種子」が生まれたとする。これら通説の特徴は、二つある。第一は、スターリンのパーソナリティおよびリーダーシップを重視する点である。たとえば、ヒントンは、いう。「スターリンの存命中、中国共産主義者たちは、中ソ関係において、(ソ連に)従属的、協力的役割をはたす気持があった。しかし、五三年にスターリンが死ぬと、このような気持は雲散霧消しはじめた」というのも、「毛沢東は、自分の方が、スターリンの後継者達に比べ、イデオロギー上も、政治上も、優秀であると感じたうえに、彼ら、とくにフルシチョフが、北京のインタレストに反する政策をとりはじめたからである」。第二は、共産主義イデオロギーのもつ求心的側面を重視するのあまり、その遠心的側面を看過しがちなことである。ザゴリア自身、再版にあたり、共通のイデオロギーが、対立を「制約」するよりもむしろ「尖鋭化する」局面を見逃していたことを、反省している。

しかし他方、欧米には、中ソ対立を、米ソ対立などと比べ、もっと根深いものと説く、もう一つの見方がある。六九年の国境衝突とそれに続く七〇年代はじめの米中接近をまのあたりにして勢いをえてきた見解である。仏のM・タチュの見方が、その典型といえる。タチュによれば、米ソ間の対立は、両国が戦後両陣営の旗がしらに祭りあげられはしたものの、現実には戦火を交えたことのない、いわ

は「偶然的」⁽⁷⁾、人為的な対立である。ところが、中ソ間の対立は、民族、人種をまったく異にするのみならず、世界最長の国境を共有し、ツァーリズム以前から、むしろ和解の時期を例外的とする、長い対立の歴史をもつ、現実的「直接的」な対立である。後者の対立のほうが、より宿命的、深刻でさえあるといえる対立である。

このように、片やイデオロギーや政治指導者を重視する学説と、他方において地政学的な要因を含むいわばアプリアリな対立の契機を強調する見解との両極の、いわば真ん中において、その両者を巧みにバランスし、中ソ関係をより包括的、統合的に掌握しようとするのが、既述のごとく民族、国家、イデオロギー、政府の四レベルに目配りをおこなう中嶋氏の基本的視角といえよう。やや総花的とはいへ、誠に有効な枠組の提示、と評価されるべきである。

ところで話をもう一度中ソ対立の出発点に戻すと、欧米の所説中、この点において、中嶋氏の見解にもっとも近いのは、英のD・フロイドの著作といえる。すなわち、フロイドは中ソ対立の起源を、スターリンの死以前の時期に遡らせ、すでに四九年の、中華人民共和国の成立とはほぼ同時に、中ソ対立が開始されたと考える。また、フロイドは、「中国とロシアの二国間における、伝統的なフリクションのポイントとして、満州、旅順、大連、新張、外モンゴル」⁽⁸⁾を挙げていいるが、これも、中嶋氏の強調する地域(三一―一四頁)と一致する。一例として、中ソ友好条約締結(五〇年)にかんするフロイドの叙述をみてみよう。フロイドによれば、同条約が、少なくとも書類面で見ると、スターリンの譲歩ではあるが、「実際上は、

重要なものをほとんど何も毛沢東に与えていない。それどころか、書類面においてすら、対中国への圧力を放棄する意志のないことを示した⁽⁹⁾。このような中ソ条約の解釈は、中嶋氏の見方(九八―一〇三頁)にきわめて近いといえるであろう。フロイドは、引続いて、「この二人の会見の詳細はまだ明らかではないが⁽¹⁰⁾」と断つたうえ、毛沢東とスターリンの最初にして唯一の会見が毛にとり失望であったことは、疑いがないと推測しているが、中嶋氏が、さらに一歩踏みこんで、新しい中国文献を用いて、フロイドの推測を裏づけているのは注目値する(一〇〇―一〇四頁)。結論として、フロイドが、この「毛のスターリンとの出会いが後の中ソ関係に与えた意義をいくら過大評価してもすぎることはないだろう。それは、毛のロシア人になりたいする政策および態度の形成に深甚なる影響を与えざるをえなかったからである」と述べているのは、「スターリンと毛沢東との出会いの真実」のなかで、中ソ関係が「その出発点においてすでに深い亀裂を宿していた」(一〇三頁)とみる中嶋氏の評価と軌を一にしているように思われる。

中嶋氏の書物をしてきわめてバランスのとれているものとしているもう一つの例として、朝鮮戦争にかんする章(第四章)をあげたい。氏は、「同戦争を、今日の中ソ関係の重要な源泉と捉える。冷戦一般、朝鮮戦争の起源および同戦争におけるソ連の役割をめぐって、欧米の専門家間に、いわゆる伝統主義学派と修正主義学派の論争があること改めてのべるまでもない。中嶋氏は、小此木政夫氏やR・シモンズら若い学究の朝鮮戦争研究に敬意を払う。しかし、米国内に

においても、シモンズの見解が、内戦的局面を強調するのあまりソ連の影響を過少評価することとなり、結果的には、修正主義の立場に近いという批判が加えられている。中嶋氏も、やや同様に「シモンズは、ソ連の役割をいささか低く評価している」(二七頁)として、むしろA・ウラム、G・ケナンの説などを、積極的に紹介する(二四―二七頁)。そこで、自身は、「朝鮮戦争は、スターリンの戦後アジア政策および中華人民共和国の成立に伴う中国政策に関連した国際戦略を大きな背景としながら、同時に朝鮮半島内部で過熱していた南北対立を触媒として、まさに「民族の戦争」として必然的に勃発したものでなかったか」という「仮説」を提示する。つまり、国際的側面と国内面との二つの局面を統合し、互いにするやや総花的な観もするが、包括的「バランスある視角といえよう」。

- (1) Harold C. Hinton, *The Bars at the Gate: Chinese Policy-making Under Soviet Pressure*, (Stanford, California: Hoover Institution on War, Revolution and Peace, 1971), p. 7.
- (2) Richard Lowenthal et al, *The Sino-Soviet Dispute*, (New York: Frederick A. Praeger, 1962), p. 39f.
- (3) Donald S. Zagoria, *The Sino-Soviet Conflict 1956-67*, (New York: Athencum, 1964), p. 39f.
- (4) Hinton, *op. cit.*, p. 7.
- (5) *Ibid.*
- (6) Zagoria, *op. cit.*, p. xix.

- (7) Michel Tatu, *The Great Power Triangle: Washington-Moscow-Peking*, (Paris: The Atlantic Institute, 1970), pp. 5-10.
- (8) *Ibid.*, pp. 10-13.
- (9) David Floyd, *Mao Against Khrushchev: A Short History of the Sino-Soviet Conflict*, (New York: Frederick A. Praeger, 1963), pp. 11-12.
- (10) *Ibid.*
- (11) *Ibid.*, p. 13.
- (12) *Ibid.*, p. 12.
- (13) David S. G. W. Stueck, "The Soviet Union and the Origins of the Korean War," *World Politics*, (vol. 28, No. 4, July 1976), pp. 622-635.

二 中ソ対立の纏

本書の第二の特徴は、中ソ関係の対立的側面をかなり強調している点に求められるかもしれない。例によって、欧米の学説と比較してみよう。

欧米には、一つのグループとして、中ソ両国の共通面を強調する専門家が、たとえばD・バーネット⁽¹⁾のいる。「四九年以後の十年間のほぼ全期間にわたって、中国外交政策のかなめは、ソ連との同盟であった。すなわち、中ソ両国は、軍事同盟を結んだ。経済、科学、教育、その他の分野においても、広範な関係を発展させたのである。北京のリーダーたちは、ソ連の経済的経験を、中国

のための発展モデルとしてうけ入れ、ソビエトの忠告と援助の約束のうえにたつて、自己のプログラムをつくった。……中国のリーダーたちが、中国の利害をこれほど外国の一家のモデルにリンクさせたことはなかった。したがって、バーネットは、たとえば、シモンズが「四九一五〇年および朝鮮戦争を通じて存在していた中ソ間の緊張の深刻性を誇張しすぎている」と、批判する。E・マイケルにいたっては、さらに次のように述べる。「細部にわたるコンフリクトにもかかわらず、スターリンは、毛沢東を、有能な中国共産党にふさわしい指導者とみなし、その権力への上昇を決して妨げないどころか、むしろ承認し、援助さえし」、また「毛沢東の側も、スターリンの支持を承認し、その戦列にとどまり、スターリン崇拜の構築に参加した」と。

中嶋氏の立場とこのような欧米の一部の見解とは、かなり差があるように見受けられるが、書評者には、そのいずれの見解を支持すべきかにかんし、独自の証拠資料も意見もあわせていない。

ただ、中嶋氏の見解にたいする書評者のコメントとして、中ソ関係をやや一枚岩的に捉えられている印象を受けることはある。たとえば、まず用語でいうと、右のバーネットは、conflictの他に、friction, strains, tension, differences, Gulf, rift, confrontation, battleなどを併せ用い、両国の対立の幅のニュアンスを区別しようとしている⁽⁵⁾。他方、中嶋氏は、「潜在的に萌芽していた」(一四五頁)ないし「秘められた」(一頁)「対立構造」(七頁)が「公然化」(三三頁)した、……という表現がしめすように、対立が潜在的か顕在的かとい

う縦軸、すなわち時系的変化の側面を強調しようとするのあまり、それと横軸との関連づけ、すなわち中ソ関係の果してどの局面がどの段階で、どのように発展したのか、という点を、さほど明確にされていない恨みがある。もつとも、このような私の印象批判にたいしては、四つのレベルの重層対立関係を問題意識として提案されかつ「絶頂期においても、さまざまな緊張と異和が存在した」(二五二頁)という箇所などに、そのような目配りがなされている事実が、指摘されるであろう。とはいえ、この最初に提起された四つのレベルが、本書の全体で、そして、たとえば、中ソ友好条約、朝鮮戦争、高崗事件の各々のいわばケース・スタディにおいて、完全に区別され、十分説明され、展開されて尽されているとは、いい難いのである。恐らく、これは、資料の制約からも、言うは易く行うは至難の、ないものねだりではあろう。にもかかわらず、著者の無限の向上能力を言うが故に、書評者が、次作に期待する点なのである。

G・ケナンは、いかなる二国関係においても、完全なる対立ないし協調がありえず、つねに相対的なものであることを、次のように指摘している。「この複雑な現代世界において、インタレストの完全な対立、ないし、その完全な合致といった国際関係は、存在しえないであろう。すなわち、インタレストの両種の要因——尤も、その両要因の混り合は、様々ではあるとはいえ——を含まない関係はありえないだろう」。

このような視角にたつて、中ソ関係の推移をみようとしたものと

して、T・ロビンソンの研究がある。ロビンソンは、中ソ両国のナショナル・インタレストを、①「合致する」、②「補完する」、③

「対立する」ものの三種に分ける。①の典型例としては、世界における共産主義的影響の拡大があり、②の例としては、ソ連にとつてのヨーロッパにおける反米、中国にとつての台湾における反米闘争、③の例としては、国境問題、等が挙げられる。いうまでもなく、ロビンソンは、四九年以後、中ソ関係には、①や②の局面が減少する一方、③の局面が増大する趨勢にあることを証明しようとしている。要するに、中ソ関係は時と場合との両局面を考慮しつつ、立体的に検討せねばならない、実に複雑な生き物として捉える必要がある。

(一) A. Doak Barnett, *China and the Major Powers in East Asia*, (Washington, D. C.: The Brookings Institution, 1977), p. 26.

(二) *Ibid.*, p. 343.

(三) Franz Michael, *Mao and the Perpetual Revolution*, (New York: Barron's/Woodbury, 1977), p. 102.

(四) *Ibid.*

(五) Barnett, *op. cit.*, pp. 20-87; pp. 340-356.

(六) George F. Kennan, "The United States and the Soviet Union, 1917-1976," *Foreign Affairs*, (vol. 54, No. 4, July 1976), p. 674.

(七) Thomas W. Robinson, *A National Interest Analysis of Sino-Soviet Relations*, (Santa Monica: Rand Corporation, March 1966).

三 歴史の後智恵

最後に、中嶋氏とともに、現在の視点から過去の事件を解釈し裁断することの意義と陥罪について、考えてみたい。

中嶋氏は、「歴史の後智恵」ということに触れ、「中ソ対立の今日的な帰結のゆえに、これまで透視できなかった中国やソ連の意志と行動の真実が徐々に明らかに」なってきたことを、指摘する。(一—二五—二五—三三頁の如し)このことは、明らかに、利点である。しかし、他方、後の時点から歴史を再解釈することに潜む陥罪もある。

中嶋氏の説くように、「ソ連や中国の動向を……(中ソ)相互の論難を通じて垣間見る」(一〇六頁)ばあいに、このことはとくに顕著といわねばならぬ。より具体的にいえば、中国をソ連の文献により、逆にソ連を中国文献を用いて解釈することのメリットとデメリットである。たとえば、先にも紹介したマイケル博士は、のべる。「毛沢東の初期の政策路線を、共産主義イデオロギーよりも、中国のナショナリズムを代表するものとして、再構築しようとする最近のソビエトの試みは、現在の中ソ対立、ならびに毛沢東弾劾せんとするソビエトの政治的目的の光に照らして、理解せねばならぬ」として、最近放出された文献、たとえば、O・ウラジミールフやO・プラーウンを重用とする危険を警告している⁽⁸⁾。同様に、ソ連が最近出版し中ソ関係にかんする(現在のところ)決定版とするO・B・ホリーソフ＝B・T・コロスコフ(筆名)の『中ソ関係』⁽⁹⁾についての資料的価値についても、欧米の学者は手厳しい。たとえば、K・リーバー

タルは、一貫して同書貫く「反ソ毛沢東的民族主義ショービニストVSプロソビエトの国際主義の闘争」という視点から中国を捉えようとする硬直した方法論を、要注意としている。⁽⁴⁾また、同書の初版を英訳・編纂した米国のV・ベトロフ教授自身、同書を「ソビエト外交政策のカレントな必要に奉仕する」ものと規定している。また、ヒントソ教授にいたっては、「同書において中ソ論争にかんしソ連側から出された新資料は大してなく、そのほとんどが純然たる宣伝」である⁽⁵⁾とみてゐる。

結論として、バランス感覚と大胆な見解の提示を併せ有する中嶋氏の本書は、中ソ対立にかんし、わが国の国際政治学界がはじめて生んだ、国際的レベルの学術書といって、差支えない。今後の研究者は、本書の提起した問題とレベルを離れて、も早や中ソ関係を論じえなくなつたこと改めていふまでもない。

(1) Michael, *op. cit.*, p. 101.

(2) *Ibid.*, p. 101 and p. 298.

(3) 初版は「O. B. Борисов, В. Т. Колосков, Советско-Китайские отношения 1945-1970 (Москва: Издательство «Мысль», 1971)」、その英訳は「第(5)°再版は「Борисов, Колосков, Советско-китайские отношения 1945-1971 (1980-анне второе, дополненное) (同, 1977)」、その邦訳は「滝沢一郎訳『ソ連と中国』(東京:サイマル出版会、一九七九年)上下。

その他「O. B. Borisov, В. Т. Koloskov, Sino-Soviet Relations

1945-1973, translated by Yuri Shirokov (Moscow: Progress Publishers, 1975) 548p°.

(4) Kenneth G. Libenthal, "Sino-Soviet Relations: Moscow's View," *Problems of Communism*, (vol. 25, Jul-Aug. 1976), p. 83.

(5) O. B. Borisov and B. T. Koloskov, *Soviet-Chinese Relations 1945-1970*, edited with an introductory essay by Vladimir Petrov. (Bloomington: Indiana University Press, 1975), p. xiv.

(6) *Slavic Review*, (vol. 36, No. 3, September 1977), p. 510.

(筆者は北海道大学スラヴ研究センター教授)